# 第３章　貝塚中心部の発掘調査

## 第１節　調査の目的と方法

轟貝塚は，古くから度重なる調査が行われ，轟式土器の標式遺跡であることもあって非常に著名な遺跡である。しかし，近代考古学の発展と共に行われてきたそれらの調査は，人骨の検出や貝層の調査が主体であり，現代的な視点で貝層を含めた遺跡全体―すなわち人が生活した集落全体やその暮らしの遷り変わりなど―について検討し得るような成果には乏しかった。特に轟貝塚の代名詞とも言える，轟式土器を伴う縄文時代前期の状況については，過去に実施された調査ごとに層位の理解や所見に若干の相違が認められ，貝層の形成が前期に遡るかどうかさえ定かではない状況である。また，過去の調査で多数発見された人骨についても，埋葬土壙の検出面ではなく人骨そのものの出土位置で記録されているため，それぞれどの層位（＝時期）に属すものかが不明瞭という問題がある。

こうした状況から，過去の調査成果を正しく評価し，現状での遺跡の理解を明確にするため，過去に多くの発掘調査が行われてきた貝塚中心部の層序を今一度整理し直す必要がある。以上の目的で行ったのが，平成26～28年度の貝塚中心部における発掘調査である。

調査はあくまで遺跡の保存・活用のための基礎資料収集が目的であり，発掘調査といえども遺跡の破壊は最小限に止める必要がある。また，過去の調査で記録された層序を再確認するには，直接同じ場所の土層を確認するのが最も早く，効果的である。そうした考えにより，平成26年度はまず過去の調査区を検出し，埋土を再掘削した上で層序の検討を行う再発掘調査として実施した。その上で，調査区の拡張や一部新たな調査区を設けるなどして，各層の出土遺物と時期の検討を行ったのが平成27～28年度の調査である。

再発掘調査の対象としたのは，多くの遺物や人骨が出土した京都大学による第２次調査（1919年），松本雅明による轟Ａ～Ｄ式の型式分類の基準となった熊本大学を中心とした第５次調査（1958年），多くの遺物と共に層位に関する最も詳細な記録が残る慶応大学を中心とした第６次調査（1966年）の３調査である。調査地点は計８か所で，１Ｔ・２Ｔは６次調査，３～６Ｔは２次調査，７Ｔは５次調査の再発掘を目的に設定した（図３）。また，各層に含まれる遺物を正確に把握するには一定量の新規掘削も必要とみて，最後に再発掘ではない８Ｔの調査を実施した。

## 第２節　調査の成果

### （１）基本層序

調査の結果，全体の土層･貝層を以下のとおりⅠ～Ⅵ層に分層した（写真１及び第４章総括図４参照）。

表土であるⅠ層は畑に伴う耕作土である。下部の貝層を撹乱しているため多量の貝殻を含み，雨などにより土が洗い流されると一面が真っ白になる程である。その下のⅡ層は，ほとんど表土と変わらないが若干しまりが良い混貝土層である。遺物は縄文時代から近代まで多岐にわたる。ここまでが近現代の撹乱層である。

Ⅲ層は貝層で，いわゆる純貝層と呼べるものから混土貝層と呼ぶべき土混じりのものまで，場所によりやや濃淡がある。主体を成す貝の種類により大きく２層に分けられ，上部のⅢａ層はカキ殻を主体とし，阿高式など縄文時代中期の遺物が含まれる。昭和41（1966）年の第６次調査で「純貝層」と表記されたものに対応する。下部のⅢｂ層はハイガイやハマグリを主体とし，Ａ～Ｄ式の別なく広義の「轟式土器」を含む。この貝層については，過去の調査記録の中に明確に対応するものが見出せないが，慶応大学による調査を指揮した江坂輝彌氏は前期の貝層が存在することを示唆しており，それがこのⅢｂ層を指していた可能性がある。

Ⅳ層は褐色土層である。これも上下２層に分けられ，上部のⅣａ層は多量の貝殻や獣骨・魚骨を含む

他，轟Ｂ式土器をはじめとした多くの遺物が出土している。後述する貝殻廃棄土坑や集石の存在など，縄文時代前期とみられる生活痕跡を多く含む土層であり，貝層形成前にも同所で人々の暮らしがあったことをよく示している。下部のⅣｂ層は，Ⅳａ層に比べやや黒色がかった暗褐色土である。遺物や貝殻・獣骨等の混入はⅣａ層に比べ大幅に少ない。数は少ないながら，轟式土器の他に塞ノ神式土器，押型文土器などを含み，時期は縄文時代前期か，早期末葉に遡る可能性がある。なお，土層のテフラ分析を行った結果，Ⅳｂ層の上半部からⅣａ層にかけて，鬼界アカホヤ火山灰に由来する火山ガラスが含まれることがわかっている。

Ⅴ層は黒色土層である。Ⅳｂ層と同様，轟式土器や一部塞ノ神式土器とみられる遺物を含むが，詳細な時期については遺物の整理を待って，いずれ本報告にて言及したい。Ⅳｂ層が早期末に遡る可能性があることから，ここではこのⅤ層も早期に遡る可能性があることだけ述べておきたい。ごく微量だが貝殻や獣骨も出土しており，小規模ながら周辺に人の生活が営まれ始めていたことが推察される。

Ⅵ層は黒色砂質土と粘質土，それに地山である黄褐色ローム土とが混ざる粘質土である。土質から何らかの水成堆積である可能性が考えられ，地山の土が部分的に混ざる点からは，地山を削るような激しい流れなども想定できる。遺物は土器などがごく微量出土しているが，時期など詳細は不明である。その下部が，固くしまった黄褐色ローム様の地山である。

**（２）検出遺構**

過去の調査区の再掘削後に行った調査区床面の掘り下げや外側への拡張，また新たに設けた調査区（８Ｔ）の調査などにより，縄文時代早～前期とみられる遺構を複数確認した。

まず最も目を引くのが，３Ｔ・５Ｔ・８ＴにおいてⅣａ層の下部（Ⅳｂ層上面付近）で検出した集石遺構である。検出した礫の大半が被熱しており，調理などに使用された可能性が高い。ただし明確に土坑を伴うものは無く，検出状況も広範囲に散乱していて単位が不明瞭である。こうした点から，これらは使用時の状況そのままでなく，使用後に土坑からかき出されるなどした二次的な状況が，複数重なり合って検出されていると考えられる。集石にはいわゆるミミズ腫れ状の隆帯を持つ典型的な轟Ｂ式土器が伴っており，縄文時代前期の遺構と考えられる。また，４Ｔでは同じくⅣａ層下部からⅣｂ層に掘り込んだ，焼土と焼けた貝殻などを覆土とする土坑も検出しており，炉穴と推定される。これらの発見により，貝層の下に縄文時代前期の生活面が残されていることが明らかとなった。

その他の遺構として，集石や焼土坑よりやや新しいⅣａ層の中ほどから掘り込まれた土坑がある。これらはハイガイを中心とした多量の貝殻を覆土としており，貝殻を廃棄するための土坑と推察される。これを８Ｔで２基確認したが，広く面的に調査をすれば他にも検出される可能性がある。前期とみられる貝層（Ⅲｂ層）の下に位置することから，これらはまとまった貝層が形成される前段階の，スポット的に形成された小規模貝塚と位置付けられ，轟貝塚における貝層形成の最初期の姿を示すとみられる。

３Ｔ及び８Ｔにおける人骨（土壙墓）の検出は，過去の調査の再評価を目的とする今次調査で特に注目すべきものである。合計５体確認した人骨のうち４体（１～４号人骨）は，Ⅳａ層最下部に形成された集石の下から検出され，Ⅳｂ層に属すことから縄文時代早期（末葉）に遡る可能性がある。いずれも仰臥屈葬の姿勢をとることから埋葬人骨であるのは間違いないが，土壙墓のプランが検出できなかった。ひとつの可能性として，明確な土壙を持たない盛土による埋葬形態が想定される。残る１体（５号人骨）はやや不明瞭ながら土壙を伴う。それはⅣａ層に掘り込まれ，上部をⅢｂ層が覆うことから，Ⅲｂ層の貝層が形成される前段階に位置づけられ，時期は縄文時代前期と考えられる。また，人骨の直下に前述のスポット貝塚が存在する点からは，スポット貝塚が形成された時期とⅢｂ層が形成された時期の間に若干の開きがあり，その間に埋葬が行われたことがうかがえる。

大正８（1919）年の第２次調査を筆頭に，過去の調査で多くの人骨が発見されているが，残る記録はどれも人骨そのものの検出位置であり，土壙の有無や，それがどの層から掘り込まれるのかが不明である。よって，それぞれがどの時期に属す人骨なのかが不明という問題がある。今回の発見により，埋葬時期が縄文時代早期と前期の２時期に分かれる可能性があることが明らかになった点は重要である。

**（3）遺跡の変遷**

以上の調査成果により，これまで体系的に描かれることの無かった轟貝塚における土地利用の変遷がおぼろげながら把握できた。貝塚が存在する台地の先端部分に限ったものではあるが，縄文時代における遺跡の変遷は概ね以下のとおり７つの段階に分けて捉えられる。

１．周辺における土地利用の開始（Ⅴ層　縄文時代早期？）

小規模だが，遺跡周辺において貝（魚介類）や獣など，山海の食料資源を人が利用し始める。

２．台地の先端が墓域として利用される（Ⅳb 層　縄文時代早期末～前期）

３．盛んに煮炊きを行うなど，生活の場となる（Ⅳa 層　縄文時代前期）

被熱した集石や焼土坑の存在，包含層に含まれる多量の食物残滓（貝殻・獣骨・魚骨など）による。

轟貝塚におけるアカホヤ降灰のピークと重なるが，明確な火山灰層を形成する程ではなく，集落の存続には大きな影響は無かったと考えられる。

４．土坑に貝殻を廃棄した，スポット状の貝塚が形成される（Ⅳa 層　縄文時代前期）

５．墓域が形成される（Ⅳa 層　縄文時代前期）

６．ハイガイやハマグリを主体とする貝層が形成される（Ⅲb 層　縄文時代前期）

Ⅲb 層の検出位置や厚さから，貝層は台地先端部のほぼ中央に塚状に形成されたとみられる。

７．カキを主体とする貝層が形成される（Ⅲa 層　縄文時代中期～後期初頭）

Ⅲa 層の検出位置や厚さを総合すると，貝層は台地の西側斜面に広く形成されたとみられる。

８．貝層（廃棄場所）を含む生活の場が北側の微高地に移動する（縄文時代後期）

昭和41（1966）年の慶応大学を中心とした調査の成果による。

この他，表土や撹乱層から出土した多くの遺物により，弥生時代・古墳時代・中世などにも盛んな土地利用があったことがうかがえる。

**写真１　標準土層断面**（４Ｔ 南東壁）

**写真２　集石検出状況**（８Ｔ）

**写真３　集石に伴う遺物**

**写真４　５号人骨検出状況**（８Ｔ）

# 第４章　総　　括

古くから世に知られ，度重なる発掘調査が行われてきた轟貝塚は，轟式土器の標式遺跡であることと併せ学史上非常に重要な遺跡である。しかし一方で，遺跡の範囲や時期ごとの変遷など，遺跡そのものの基礎情報が長い間未解明であった。特に，轟貝塚の代名詞とも言える轟式土器を伴う縄文時代前期については，貝層を含めて明確な遺構の発見がこれまでに無く，実態が不明であった。そうした点を課題とし，遺跡の全体構造や変遷を解明することを目的に実施したのが前章までで述べた平成23～28年度の発掘調査である。

貝塚に伴って付近に存在すると考えられる居住域の確認を目的に行った平成23～25年度の貝塚周辺部の調査では，貝塚の想定堆積範囲の北西側縁辺部でわずかに縄文時代後期の痕跡を確認した他は，調査したほとんどの地点で縄文時代の遺構はおろか，遺物包含層すら確認できなかった。後世に削平された可能性も考えられるが，一方で弥生・古墳時代や中世遺物が多く出土している点を考えれば，元々縄文時代の遺構・遺物の密度が低いとみるのが自然である。このことは，轟式土器が使用された縄文時代前期や大規模に貝層が形成された中期において，貝塚北西側の微高地では顕著な土地利用が無かった可能性を示唆している。

一方，過去に多くの調査が行われてきた貝塚中心部について，層序等の再確認のため実施したのが平成26～28年度の調査である。平成26年度は主に過去の調査地点の再発掘と土層の再確認を中心とした調査，27～28年度には確認した層序を基に，調査区の拡張や一部において新規掘削を行い，改めて層ごとの遺物抽出と遺構検出に努めた。調査の結果，全体の土層・貝層を図４のように理解した。まず特筆すべきは，貝層の細分化により過去の調査で把握されていなかった前期の貝層を確認したことである。貝層は大きく上下２層に分けられ，上層（Ⅲａ層）はカキを主体とした純貝層で，昭和41（1966）年の慶応大学による調査（第６次調査）で阿高式土器を含む中期の貝層とされたものに対応する。対する下層

（Ⅲｂ層）はハイガイやハマグリを主体とし，貝殻条痕を持つ広義の轟式土器を含むことから縄文時代前期に遡ると考えられる。第６次調査を指揮した江坂輝彌氏が存在を指摘するも，当時の図面上で確認できない「轟式後半の時期のハイガイの多い薄い貝層」（江坂1971）とは，このⅢｂ層にあたる可能性が高い。また，更に下層の褐色土（Ⅳａ層）中では多量のハイガイを覆土とする土坑が確認され，こうしたスポット状の貝の廃棄が，轟貝塚における貝殻多量廃棄の初期の姿と考えられる。

第二に，貝層の下で発見された縄文時代前期とみられる生活痕跡が注目される。前期の生活痕跡は主に貝層下の褐色土層（Ⅳａ層）中にあり，貝殻以外にも多量の獣骨・魚骨などの食物残滓が含まれる。Ⅳａ層最下部では被熱の激しい集石や焼土坑が検出され，轟Ｂ式土器を伴っていた。明確に轟式土器を伴う前期の遺構は，長い調査史を持つ轟貝塚でも初の発見である。

第三は，埋葬人骨の検出である。上記の集石の下（Ⅳｂ層）から４体，前期の貝層（Ⅲｂ層）の下から掘り込まれた土壙中に１体と，計５体が検出された。いずれも仰臥屈葬の埋葬状態を保ち，改葬や撹乱を受けていない。Ⅳｂ層中の４体については土壙墓のプランが確認できず，顕著な土壙を伴わない盛土のみによる埋葬も想定される。出土層位により，人骨はそれぞれ縄文時代早期末と前期の２時期に分けられる。京都大学をはじめ過去の調査でも多数の人骨が出土しているが，帰属する層位が明確なものは今回の発見が初めてである。また，早・前期の人骨がまとまって検出されること自体が稀であり，人類学的にも貴重な資料と言える。

以上の調査成果を総合すると，第３章や図４に示したように土地利用の変遷を計８期に分けて捉えることができる。それはあくまでも調査を行った台地先端部の状況だが，遺跡全体の変遷を把握する上で大きな前進と言える。今後，遺跡の更なる理解のためには，未だ調査の及んでいない貝塚南東側低地部の状況や，谷を挟んで向かい合う西岡台貝塚との関係を確認することが検討課題となる。

【引用・参考文献】

宇土市教育委員会1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集

宇土市教育委員会2005『轟貝塚・馬門石石切場跡―宇土市内遺跡範囲確認調査概報―』宇土市埋蔵文化財調査報告書第27集

宇土市教育委員会2006「轟貝塚」『轟貝塚　馬門石石切場跡―宇土市内遺跡範囲確認調査報告書―』宇土市埋蔵文化財調査報告書第28集

宇土市教育委員会2008『轟貝塚―慶應義塾大学資料再整理報告―』宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集

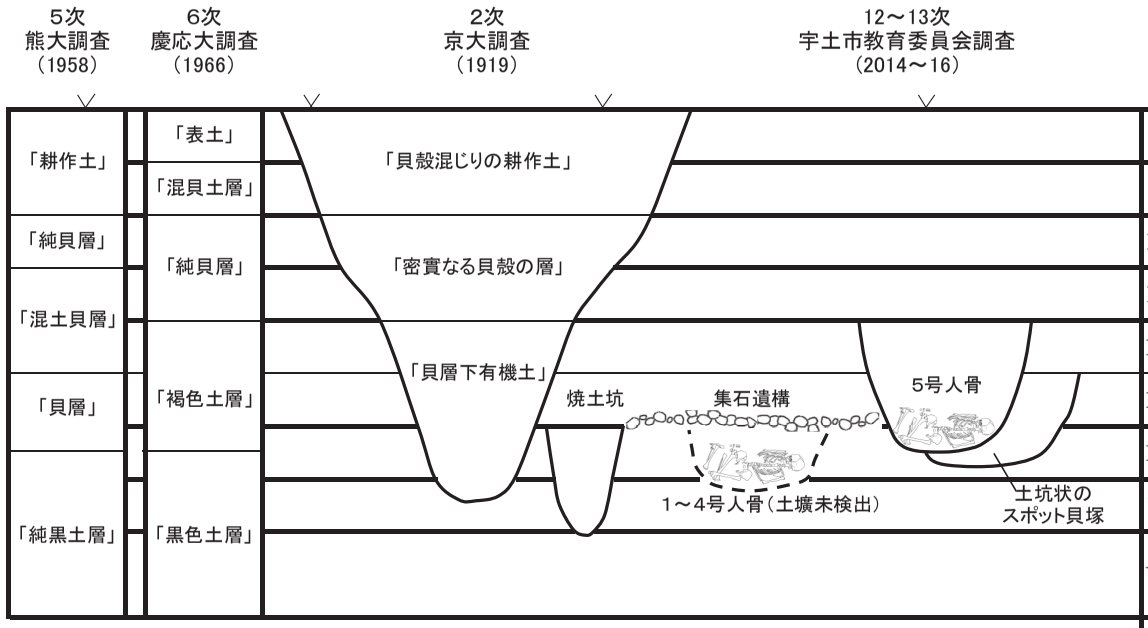
江坂輝彌1971「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』第19号　日本考古学協会

清野謙次1920「肥後国宇土郡轟村宮庄貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊

濱田耕作・榊原政職1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊

松本雅明・富樫卯三郎1961「轟式土器の編年―熊本県宇土市轟貝塚調査報告―」『考古学雑誌』第47巻第３号日本考古学会

松本雅明1967「肥後考古学会の成立前後」『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿刊行会




| 層位名 | 特徴 | 出土遺物（土器型式） | 時期推定 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ層 | 表土・耕作土 | 縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・埴輪片・陶磁器類ほか | 現代 |
| Ⅱ層 | 混貝土層 | | 中世～近現代 |
| Ⅲa層 | 貝層（カキ主体） | 阿高式，並木式 | 縄文時代<br>中期 |
| Ⅲb層 | 貝層（ハイガイ・ハマグリ主体） | 轟式（Ａ～Ｄ式含む） | 縄文時代前期 |
| Ⅳa－１層 | 褐色土（上層）<br>貝殻等多量含む | 轟式 | 縄文時代前期 |
| Ⅳa－２層 | 褐色土（下層）<br>貝殻・アカホヤ含む | 轟式（Ｂ式が主体か） | 縄文時代前期 |
| Ⅳb層 | 暗褐色土<br>アカホヤ微量・軽石含む | 轟式，塞ノ神式，押型文 | 縄文時代早期末～前期 |
| Ⅴ層 | 黒色土 | 轟式，塞ノ神式 | 縄文時代早期？ |
| Ⅵ層 | 黒褐色粘質土<br>砂質土・粘質土・地山のロームが混じる | | 縄文時代早期以前 |
| 地山 | 黄褐色ローム様 | | |

土地利用の変遷

１期　土地利用の開始（Ⅴ層　縄文時代早期？）
　　小規模ではあるが，遺跡周辺において貝（魚介類）や獣などの食料資源を利用し始める。
２期　台地先端が墓域として利用される（Ⅳｂ層　縄文時代早期末～前期）
　　３Ｔ出土　１～４号人骨
３期　盛んに煮炊きを行うなど，生活の場となる（Ⅳａ層　縄文時代前期）
　　被熱した集石や焼土坑の存在，包含層に含まれる多量の食物残滓（貝殻・獣骨・魚骨など）の存在による。
４期　土坑に貝殻を廃棄した，スポット状の貝塚が形成される（Ⅳａ層　縄文時代前期）
５期　台地先端に再び墓域が形成される（Ⅳａ層　縄文時代前期）
６期　ハイガイやハマグリを主体とする貝層が形成される（Ⅲｂ層　縄文時代前期）
　　Ⅲｂ層の検出位置や厚さから，貝層は台地先端部のほぼ中央に塚状に形成されたとみられる。
７期　カキを主体とする貝層が形成される（Ⅲａ層　縄文時代中期～後期初頭）
　　Ⅲａ層の検出位置や厚さから，貝層は台地の西側斜面に広く形成されたとみられる。
８期　廃棄場所としての貝層を含め，生活の場が北側の微高地に移動する（６次調査Ｅトレンチ，９次調査１Ｔ　縄文時代後期）

※９期以降　弥生～古墳時代に付近に集落形成，古墳築造？，中世の館跡，近世初期には現状の畑としての利用開始。

**図４　轟貝塚基本層序及び土地利用の変遷**